

地域に 生きる

栗畑が点在する小布施町の住宅地に出版社「文屋」はある。これまで出版した書籍は約40冊。百年後も読み継がれる一冊に」をモットーに、自宅を兼ねたオフィスで、経理などを担当する妻の朝子さん(57)らと会社を営む。

生まれも育ちも小布施町。小学生だった1969(昭和44)年、信濃毎日新聞の紙面に自作の詩が載ったことをきっかけに、書くことが好きになった。大学卒業後、長野市内の出版社で営業職に就いたが、「書く仕事に携わりたい」と須坂新聞(須坂市)の記者に転職。高校生の留学や外国人のホームステイなどを取材するうちに、海外に滞在したいとの思いが募り、退職して一年半ほどオーストラリアやフィリピンで過ごした。オーストラリアでは、休日に着飾った老夫婦が海岸沿いを散歩したり、友人や家族で一日中ハーベ

小布施町の出版社「文屋」代表

木下

豊さん

(58) 小布施町飯田

キューをしたりする光景を見掛け、日本ではなじみのないライフスタイルに憧れを抱いた。「彼らかにすると体感した」



本に囲まれた木下さんのオフィス。「百年後も読み継がれる本」を目指して書籍を手掛ける

31歳で帰国。フリーのライターとして企業パンフレットの制作などを手掛ける傍ら、地元の有志とまちづくり会社「ア・ラ・小布施」を設立した。取締役事業部長として土蔵を「プチホテル」に改装する事業などに取り組んだ。

同社を退社して念願の出版社を起業したのは、39歳だった99年。

「やるなら今しかない」との思いだった。初の書籍は2001年、志賀高原の今後の展望などについて当時の田中康夫知事らに取材してまとめた。約500ページに及ぶ力作で反響も大きかったが、販売は振るわなかった。

転機となったのが、04年に手掛けた伊那食品工業(伊那市)会長の塚越寛さんの本だった。フリーライター時代に知り合った縁で「社員向けに自分の思いをまとめた本を作りたい」との依頼を受けた。塚越さんの経営理念などを取材するうちに、一般市民にも伝えたいと思うように。最初は断られたものの、宣伝をしない約束で承諾を得た。この本「いい会社をつくりましょう」は約10万部も売れ、ロングセラーとなった。

100年先の人に役立つ本を

ら出版依頼が相次ぎ、ビジネス書を中心にさまざまな書籍を手掛けた。「塚越さんのおかげで、どんな新しい読者や著者と巡り会った」。百年先の人々のためとす塚越さんの経営理念に学び、自身も百年先の人に役に立つ本を手掛けたいと一冊の本に丁寧に時間をかける。年間に出版する本は3冊ほどだ。

まちづくり事業にも継続して携わる。有志でつくる「小布施掃除に学ぶ会」では代表世話人を務め、月1回、地元の栗ガ丘小のトイレ掃除などをして「心を磨く」運動に励む。最近では江戸時代の浮世絵師、葛飾北斎(1760~1849年)の国際的ブームを受け、有志でプロジェクトチームを結成。美術賞「北斎賞」の創設を目指し、インターネットで資金を募る「クラウドファンディング」を活用した北斎関連本の出版や、北斎をPRする催しを計画して、機運を盛り上げている。

「北斎は小布施の『美しい日常』に魅せられ、訪れたのだと思う。この小布施をモデルにして、美しい日常をキーワードにした本を作りたい」と構想を膨らませている。